085201-000-8

327-111

献芹集

福井県

M42

DBC-0132

327-111

謹で

鶴駕を迎へ奉りてかしこみ畏みもよめる

天津神の日嗣の御代のひかりくまなくて惠にもるゝ民草もなし　從五位勳五等　德山繁樹

しつかなる御代のにぎかにどよめくは日嗣の皇子をほきまつる聲　仙石亮

明日よりはあすはの山の御手植のまつやふたゝひみゆきまつらん　從七位　小山鋭三

すめ御子の御心あふきまなひやのわらは今日よりさらにはけまな　谷保太郎

かしこしや越のゐなか路はる〳〵と皇子のみことの國見せさする　正七位　鳥野幸次

うれしさにもえこそわたれ春の日の光にあたる越の民艸　布川正輔

日の御子のみひかりうけて越路こそ八束穂たるゝ秋にあふらめ　勳七等　白崎市米

明治 42 9 23 内交

かしこくも日嗣の皇子をむかへまつりあつき惠をうくる學ひ舍　羽生久安
白山の松も千歳をさゝくらん越路に君をむかへまつりて　石徹白藤之助
きはみなき日嗣の皇子の御光を越路のそらにあふくかしこさ　大舘古刀子
御惠にもれぬ御代こそかしこけれ越のしらねに老しこの身も　八十歳　内田有美
さゝれ石のいはほとなるもはかりなき君か御代にはものゝ數かは　七十八歳　加納碩圃
居なからにをかむこゝこそかしこけれ儲の君の越のみかりを　波多野廣善
あまさかる鄙の越路の秋のも中ひつきの皇子を拜むかしこさ　鷲田土三郎
のとかなるはるの御山にのぼる日の輝りあまねき御代にあふかな　從七位　眞田一夫
國のさま民のなりはひみそなはす皇大御子のめくみかしこし　今村七平
あらち山ふりにし關のあとこゝにて皇子のいてましあふくたふとさ　從七位　田口虎之助

こり〳〵に事業をおこして出ましを千代にいひつく越の御民等　牧野眞澄
露ふかき越路のたみをいとはせて成らせたまへる君か御心　石黑小三郎
たかひかる日嗣の御子のいてましをむかふもかしこ賤か身にして　中村季治
越路にもひとしほ光りますかゝみ日嗣の皇子のみかけとゝめて　從七位　加納利亮
日の御子のめくみをうけて美雪ふる越路の秋はゆたかなりけり　石徹白元之助
みのりありて足羽山よりみそなはす田面のいねの花のまさかり　武内忠良
貧氣なき日のみひかりの照りそひて八束足穗のたれる秋哉　清水度計
ゆたかなる秋のみ空に御車のおとの下風あふくたみくさ　正玄咲久
畏こくも三越路かけてみめくみの露にいろそふ秋の八千艸　常見溪嵐
こしちさし日嗣の御子のみことまて巡りたまへる御代そかしこき　竹村忠近

久方の天照る春のみひかりをこし路の空にあふくかしこさ　山本八重子

たくひなき幸あるけふのよろこひをうくるも御代のひかり成けり　中村幾代子

秋草の露をはらひてすめみ子のたまの御車むかへまつらむ　田まさ子

おいか身のうさもわすれて久方のみそらの光りあふき見まつる　杉田平十郎

御光のあまねきかけのめくみより越路の秋はゆたけかりけり　小林守忠

みくるまのわたちの風に靡くらんいてましあふく陸路の民　分部文龍

あなうれしあなたふとしや高照日嗣の皇子のいてまし迎へて　牧野政寶

陸路の物さま〳〵をいやひろくみそなはさんとめくりましける　河崎たつ子

おもひきや日嗣の君を天さかる鄙のたみくさをかむへしとは　宮永惟一

不二につく越のしらねの高御座たかしりませる君をあふく哉　松原はつえ子

みさきおふ鶴にしとへはみしりへは玉江の波に龜そうかへる　護城春章

くさむらにすむ松蟲の聲々に君のいてましまちいつるらむ　大柳するる子

打仰くすめ大御子のみひかりは越路の里にかゝやきにけり　江口由五郎

皇御子の千代のひかりをあふく哉惠あまねきみわたちの跡　喜多山なは子

ためしなき聖の御代にうまれあひてゐなから拜む皇大御子を　竹谷藤久松

すめみこをむかふる民の笑顔こそあふれいてたる眞心のかけ　大谷幾三郎

足羽川きよき流の水のいろに今日御惠のふかさをそおもふ　富山繁樹

まちわたりけふにあひつゝ民草のもゝ歡ひの色そみちける　蓑輪秀華

天さかる鄙にゐなからはるの宮をろかむ御代にあひしうれしさ　蓑輪つや子

つくろはぬ手織の衣にみをきよめ賤かおうなもむかへまつらん　蓑輪貞子

學ひやの庭のなてしこ大御子のめくみの露に咲き匂ふらん　原　喜四郎

神こみ子こ御名かへましゝ上つ代を仰きてをかむ今日そかしこき　島　房男

みこの宮むかへまつるこけふはしも萬代うたふ浦のまつ風　島　萬壽子

三雪ふる越路の民も春の日のひかりまちうる今日そうれしき　江崎いそ子

御車のすゝむまに〳〵聞ゆなりよろつ代うたふ國民の聲　從七位　石塚資雄

よろつ代の越のほまれこ仰きつゝ日嗣のみ子を拜むかしこさ　松井僊之助

越の國山又山のしつのをもけふ道芝にふしてをろかむ　尾崎貞吉

みこし路にすめるしるしのありて今日皇子のいてまし迎へ奉れる　柳本武雄

此秋は日嗣の皇子のいてまして福井のさともみやことなりぬ　大岡元次郎

かけまくも畏こきけふのいてましをあふきまつりていはふ民草　大岡ふみを子

御身つから國のさまをは日の御子のあすはの山ゆみそなはすらん　谷口　讓

大御代のめくみの露に三越路の草木おしなみいやしけるらん　藤井蔭吉

かしこくも日嗣の御子のいてましは我三越路のほまれなりけり　中谷萩野子

成らせます ひつきの御子をむかふ哉越の山松千代をうたひて　今村春子

うれしくも日嗣の御子の出ましを今日かきりなく祝ふ秋かな　今村田鶴子

かしこくも日嗣の御子の出ましをあふきむかふる越のたみ艸　杉本八十子

あひかたき御代にいつまてなからへて君ををろかむ老のうれしさ　武田藤助

有り難き君かめくみをかゝふりてなこかは民のむせはさるへき　武田初太郎

うれしさの色にいてたる越の民めくみ普き君をあふきて　岡嶋和惠子

御車にあきの七草なひくなりあふく惠の露しけくして　山田こし子

かしこくもすくれ給へる日の御子のいでましむかふ今日の嬉しさ　大和田參子

野に山に青ひと草はもえたちぬあまねく照す春のひかりに　河端金三郎

あきつ神わか日の御子のみ車のみかけをあふく今日の嬉しさ　森田覺太郎

日の御子のみかけをうけて梓弓つる賀の里もいや榮えけり　小堀正三

かねか崎神のみまへにはるの日のひかりをむかふ今日の尊さ　内田末吉

ちよろつの秋そ賑ふいつる日のひかりをあふく四方の民艸　青山樵夫

木の芽山した露しけしいてましの御先をはらへあきの初風　久間芳文

山かけの日かけのかつら日の御子のひかりをあふくけふの嬉しさ　久間むら子

かしこくも日嗣の御子を三越路にむかへまつれる今日のことほき　若林源之助

稻葉ふくあきのはつ風心あらはみさきの狹霧はらひ清めよ　辻益彦

みゆきふる越路の野邊の民艸は朝日のかけにしけりあひに鬼　辻ふさ子

御車をむかへまつれるかしこさになみゐる人は涙こほるゝ　辻陳雄

まつはらの松の木の間にあまつひの光を拜む今日そかしこき　山本梅子

おふけなき君のめくみの御光に霞む古城の名もきこゆけり　八木榮

いてましのけふのよき日を數ならぬ吾身なからもいはひまつらん　山田璋子

天津日の日嗣の皇子のいてましにあひたてまつる越のさきはひ　岩端儀太郎

いてませるわか大御子をここへにあふきまつるそ嬉しかりける　齋藤伊左衛門

八束穗の波もゆたけき此秋にかしこき君をむかふれしさ　細井勘右衛門

越路なる天にひゝきてとよめるは皇子の八千代をいはふ成けり　宇賀治芳之助

皇御子をあふく越路の野末まて今日色はにて開らく秋草　石川清次郎

へたてなき天津惠の露うけて菊そにほへる賤か庵にも　細井深士
大御子の惠の露に　この秋は越の民草おひしけるらむ　佐藤日省
三十年のふるき御あとも　あふかれてめくみにうるふ越の民草　大島徹省
つゝしみて君むかふなりものゝふのいさをも高きいしふみのもと　武田源藏
久方の雲井はるかにかりかねのあふくもあやな秋のよの月　江川三千子
大御いつあやにかしこし三越路にいてましませるけふをあふけは　三田村賀一郎
さしのほる朝日と共に日の御子の御稜威をあふく今日そ尊き　三田村須多子
なからへし甲斐こそありけれ日の御子の御かけを越の空に仰きて　八十歳　荒井彦一
此秋のたのみはことにすくれけり君のいてましありししるしに　渡邊登喜子
ときこしへに越の國人わするなよ日嗣の御子をむかへし日をは　藤井三千代子

御車をむかへまつらんしつのめか心は人におくるへきやは　高野捨松子
はるゝと都をいてゝめくりますす日嗣の御子をむかへまつらむ　藤井御舟
はらからと皆うちそろひかしこくも今日御車をむかへまつらん　藤井眞銀
晴れわたる秋のみそらに天津日のみかけをあふく越の民草　薗倉董南
しなさかる越路のさとも時を得て皇子の御車むかへまつれる　金澤與五郎
なりいつる海川野山のものら皆たてまつらんと民はいそしむ　吉村左喬
嬉しくもかひある御代に長らへてけふのいてましをろかみまつる　山口竹子
千年にもためしまれなるいてましをあふきまつれはあやに賢こき　山口巖
君か代をうたひあはして學ひ子は鶴の御車迎へまつれる　前田登代子
おいわかき男をみなもおしなへてひとつ心に君むかふなり　靜岡ひさ子

三越路の民の わさをも見そなはす其御心の ありかたきかな　正八位 佐藤泰玄

千年にも一度となきけふの日にあひたてまつることそかしこき　寺嶋勘七

かしこかる君かめくみのあまねくて柴のあみ戸もひかりさすなり　松井乘心

はひいてゝあふくもきよき月のかけ老にもかゝる菊のつゆかな　八十歳 連傳

天照す日嗣の皇子の御光をあまねくうくるこしの民くさ　岡本惠音

かたはかり殘る玉江のはしの名もけふいてましにあらはれにけり　富士根祖梁

賤の身も戸さゝぬ御代になからへて又いてましにあふそうれしき　井上一庵

御車を遠く越路にたてたまふふかきめくみをいかてわすれん　荒木林次

あなかしこ春のみやまを賤の女か里にてあふきたてまつるとは　牧かね子

この秋を千代のはしめと契るらんこしのあら野のしら菊の花　松山義子

さかえます竹の園生のいや高きみいつをあふくけふにもあるかな　市村淑子

君むかふ越の山路はもみちしてつゆにいろます民のまこゝろ　井上初枝子

さしのほる春の日影の長閑さにおひしけるらん越の民艸　上杉富摩呂

白山のたかねはくもをつらぬきて越路はるかに君をむかへん　櫻井常成

千代を祈る日嗣の皇子のいてましを今日ことほきて迎へまつれる　正八位 森田傳衛

市人もよろこひあまり時めきてけふのいてましあふきまつなり　堀江雄子

久方の天津日嗣のすめ御子をむかへまつりて祝ふうれしさ　武田義彦

千代八千代いはひまつりてよろつ民むれつゝ迎ふ越の福井に　武田貞二

おもひきや天津日嗣の大皇子の今日我里にいてまさんとは　深川方訓

三越路にいてましませるみひかりを四方の民草あふくかしこさ　七十九歳 菅谷義方

わか里の長よりあゆのいけるをは奉らんときくもかしこし　福岡五一

民草のあらんかきりはみそきして清き眞心さゝけてそまつ　榊原常雄

深雪ふる越路の里にすむ身にもけふいてましにあふそうれしき　岡崎千穎

しなさかる越のしらねにいつる日のみかけあふかぬ人なかりけり　勝木慶治

稲の穂のそろへる秋に御車をむかへまつらんこゝのうれしさ　吉村佐吉

しつのめも機織るわさをうちおきて御車むかふ秋の空哉　吉村いと子

御車をむかへまつるこしなさかる越の野山も錦かされり　山本七左衛門

しなさかる越路のさゝにすみなから今日いてましにあふそ嬉しき　野崎次郎左衛門

科阪在越の民艸よろつよの聲を雲井にきこえあくらん　小川清流

まこゝろをさきにたたして高御座あまつ日嗣のみやをむかへん　小川清風

よるひるに越の民草こそりつゝ君よろつよといはふけふかな　伴宗孝

ねかふこもおよはぬ君か御車を越の山路にをかむうれしさ　伴みさを子

日の御子のおほみ車をまさめにもをろかみまつるけふのかしこさ　佐佐木弘隆

浦里のいゆくきはみの民草はめくみの露に光りそふらん　石井義男

千年にもまたこすへなき世のさちに御車むかふわかこゝろはも　石井三已

皇御子を越の角鹿にまゐきつゝ外國人もむかへまつらん　牧幽溪

常よりも今年は秋の月なから照りまさるらんくぬかちの山　石井重滿

名におへる霞の城も春めきて日嗣の皇子をけふむかふなり　伊東來治

大御子のいてましむかうしるしにやゆたかにたるゝ四方の稲の穂　江川甚右衛門

出たゝす道まさきくと足羽山あすはの神はまもりますらし　浦谷勗

藤島のたかねの上に光る日はくもらぬ御世のすかた成けり　吉田愼平

御ひかりのあらはれませるわか君を萬代こめてむかへまつらん　八十島よき子

しなさかる越路に鶺のあとことめて千歳まれなる秋にもある哉　一色禮吉

北の民おもほしめしていてませる君か惠そたふとかりける　武田澤心

あまさかるひなの越路も御めくみのつゆにうるほふ秋にあひけり　寺本貞子

御車のとゝまりませる此夜頃むしの聲さへしつまりにける　今城龍子

紙漉きのいやしき業もみこゝろにとゝめて見ますことのかしこさ　宮川左仲

あすは山松ふく風もよろつ世の聲をたてつゝむかへまつらん　日比眞澄

またとなき日嗣皇子のいてましをかたりつかなん越の民草　松原濱之助

山ふかき越のさとまていてますをあふきまつらぬ民草もなし　林幸子

數しらぬ學ひの兒らのみむかへを君もうれしとみそなはすらん　鈴木靜子

兵士をみそなはさんと糺野に朝露ふみていてたゝします　橋本政修

はる〳〵と御めくりまして此秋はみそなはすらん越のはつ雁　林遂

足羽山神の御前に小柴さしまちまつりにしけふのいてまし　小川敏太郎

そのかみの大迹の皇子のみひかりを足羽の山にけふあふくかな　武内勝

御惠の風になひかぬ里もなく伏屋にたつる日の御簇かな　角田極

まつ風も靜かになりてしら菊の御はたにかをる越のやま里　北野乙次

長らへて越の山家も日の御子の照らします日にあひまつるかな　加藤留次郎

はれわたる秋を越路の海山もあかき御簇にいろこられけり　高村佐太郎

よろこひの聲はこしちにあふれけり日嗣の皇子をむかへまつりて　天立政次

春の宮のかけ和らけき御ひかりを居なからうくる越の民草　阿部千代子

里々になりいつるものをさゝけつゝ日嗣の皇子をむかふ民草　猪嶋春樹

をろかむは千歳をふとも叶はしを迎ふる越の民のさきはひ　高田伊作

心してむかへまつらん風あらき越路を皇子のめくりたまへは　松澤清吉

たかひかる日嗣の御子をむかへんとよめきわたる越のやま里　山内靜枝子

日の御子を拜かみまつるかしこさに民皆みちにうこなはりける　角鹿政治

越の海の雲丹さゝけんとあまのこら赤き心にねりてつくれる　加藤正夫

あなかしこ旅の御館ゆこゝかしこ一日もあたにすこしまさすて　西澤卓哉

春の日の光にあひて白山にいたゝく雪も今日はとくらん　今城光信

民草のうへおもほして皇子なから露もいとはすいてましにける　粟田助雄

皇御子のしけき惠の下露にこしの民草うるほひにけり　佐藤雅

いさ共に眞心こめてすめ御子の今日のいてまし迎へまつらん　眞杉潔

高光日嗣の宮の御車ををろかみまつるけふのたふとさ　岡野修

さやかにもふく井にうつる秋の月幾千代かけてくもらさるらん　竹内文吉

何ひとつなくさめまつるものはなし田舍にさゆるむしのこゑ〳〵　石黒甚平

君か代は礒のさゝれの數つみて世にたくひなき山となるまて　杉野庄作

八千草の葉毎のつゆもえらひなくめくみかゝふる秋の夜の月　杉野庄七

むかへまつる越路の民のよろこひは八束たり穗のほにいてにけり　吉崎宇右衛門

いてませるけふの光を三越路の草木も共にあふきまつらむ　畑彦敬

天照す日嗣の君の御車をまちわひにけり越のたみくさ　栢崎治右衛門

御車の玉のひゝきに秋の田の穂波ゆたかにうちなびくなり　藤井捨四郎

大御子の御惠ふかき露あひていよゝゆたけき三越路のあき　堀田博夫

眞心をさゝけまつりて皇御子をみむかへまつる越の國民　小林茂夫

三越路の民安かれと御そなはし深き御心たまはりにけり　杉本初次郎

みめくみの露をうけ得てうれしさに袂しほらぬ民あらめやも　山内豐道

御惠に民もなみたにむせひつゝ草木もなびく今日のいてまし　深町利右衛門

八重雲をいつの千別てくぬかちの民のさまをはごはせ給へる　小泉敎太郎

賤のめか手業になして織る機をみそなはしますことそかしこき　早瀬正二（正八位勳七等）

眞鐵道のかゝれる御代のためしにはひなのはてまてあふく御車　三澤敬太

どこしへに御代の榮えをいのるかな御手植のまつおひしけるにも　山品捨錄

しなさかる越路に今やいてまして民のなりはひみそなはすらん　谷國之助（從七位）

天離る鄙の長道をちわきして年ある秋をみそなはすらむ　井手今滋（正八位）

みこし路の磯の松風磯の波うたひいつらんよろつよの聲　北川典承（正八位）

高光る日嗣のみこの皇子なから國見まさんと御狩たゝする　福田源三郎

いてましの御車むかへ此秋はもみちもさらに色やそふらむ　鳥居きく子

白山に匂ふあさ日のかけはあれこわかひの御子の今日のいてまし　赤松祐以

はるのひの光にあひて民草もさちある今日をいはゝさらめや　小川庄三郎

高光る日の大御子のかけさして越の民草いやさかゆらん　澤崎鋏二（從六位）

手末のみつきのしなをみたから等おのも〳〵こたてまたしける　福岡甕雄

國民をいつくしみます御心にけふみそなはす三越路の秋　土生彰

皇孫の天降ましけん神代をは今のうつゝにをろかみまつる　藤井千熊

奉迎

鶴駕北巡恭賦

谷　保太郎

清秋正九月。鶴駕出皇京。沿道恤民隱。若時知世情。問安虔曉夕。宣孝啓童嬰。練歷周今古。謙沖保永貞。一人値元吉。萬國仰重明。獻頌非臣分。巴歌奉鄙誠。

土生彰

九月爽颯旺。四郊甘露臻。連疇秔稻熟。夾道芷蘭匀。鶴駕巡南越。龍旌拂北辰。采風資覽政。察俗綏編民。頌爵榮先哲。銘功賚舊臣。江湖傳盛事。億兆仰深仁。少海澄波靜。前星瑞彩新。野歌

賡擊壤。漫倣獻芹擊。

菅原兼三

仰瞻古越山。俯聽古越水。潺潺水自清。鬱鬱山添美。千里北陸天。住氣賦流峙。涼風九月秋。鶴駕巡于此。田禾漲金波。野花展錦紙。巷衢湧歡聲。億兆拜玉趾。旭旗翻萬門。瑞雲罩村市。熙熙動春光。盛事何物比。皇恩元無究。嗚呼聖太子。今也辭帝京。親臨鑒民是。至仁策功臣。洪德錄名士。隨處餘澤傳。感泣胡爲已吾生布衣微。草木可相擬。均霑雨露稠。祝福獨記喜。

松村茂隆

朱服臨前越。重光四海欽。龍符監國任。鶴駕撫軍心。穠秠秋田熟。謳歌帝澤深。氤氳籠瑞氣。霽日照山林。

勳八等　吉城彌三郎

鸞車發帝京。北國鑒民情。雲霽恩輝遍。風翻瑞氣生。青山迎扈蹕。白露洽邊城。海內傳洪德。謳歌答聖明。

瞿曇良融

鶴車巡北陸。駐蹕越前城。道路嚴清潔。官民肅送迎。仁姿頌三善。德業仰重明。手植公園上。御松千歲榮。

山本匡輔

青宮初駐駕。殊遭萬寶成。山川有喜色。萬民沸歡聲。

近藤兆平

鶴輿臨北越。千古未曾聞。草木生顏色。山河帶五雲。

佐佐木　寛

北地江山瑞氣融。謳歌擊壤歲頻豐。風迎玉駕掃前路。雲擁錦旗翻半空。闔國齊霑明德化。邊民親拜曠恩隆。溪郎田父皆相語。永使兒孫守寸忠。

竹內清風

肅肅銅輿北陸回。翠旌過處五雲開。越南風色加州景。添得恩光一帶來。

江口成德

鶴駕巡遊北陸賒。觀風察俗省桑麻。野人聊擬獻芹意。十里嘉禾九穗花。

內田謙太郎

鶴駕過邊爭送迎。滿天瑞氣五雲生。微臣欲獻昇平頌。四境嵩呼萬歲聲。

滿岡慈舟

高揭旭旗村又村。歡聲滿路說君恩。老僧七十更加一。此地初迎鶴駕尊。

奧村卓爾

恭迎鶴駕萬民親。一路塵收瑞氣新。雨露正霑閒草木。仁風吹作頃時春。

戰後皇威輝五洲。東宮守器伏龍樓。野花今日生顏色。粉飾太平糊點秋。

安間了榮

逢此休明絕古今。野人迎駕感何禁。千山總入嵩呼裏。秋在稻雲黃處深。

三田村洞

姬水蘆山路上迎。今朝鶴駕入笙城。老來始拜威儀盛。日照雙龍符上明。

堀純愚

高橋濟一

本是東宮重育英。撫軍餘暇察民情。山河南越飛霞蓋。鄴下應劉隨駕行。

大柳榮次郎

褒忠彰孝感恩榮。賜謁途頭泣癈兵。草莽微臣聞盛事。謳歌私欲答昇平。

富士根祖梁

撫軍有暇北巡來。迎駕嵩呼處處催。海內如今恩露洽。分將餘澤及蒿萊。

佐藤日省

鶴駕巡遊會此辰。滿城佳氣五雲新。清平德澤深於海。親拜恩

光涙濕巾。

正七位　魚住　完治

徂暑鶴駕發皇京。到處山川瀨氣清。一望黃雲無際限。五風十雨奏西成。

從八位　岡　競

大東天子出天神。一系連緜景福新。今日恭迎銅輦拜。鳳姿龍質自超倫。

加藤留次郎

鶴車巡北及時雍。到處稻花含露濃。父老郊迎呼萬歲。又知祝壽效華封。

橋本　環

促駕觀風北陸天。歡呼到處頌聲傳。請看恩露邊隅洽。禾穀穰穰大有年。

勳八等　市石　慧乘

幸遭鶴駕北巡年。轉感皇恩大似天。報答祗應勤稼穡。要敎香稻滿平田。

波多野廣善

明治四十二年秋。鶴駕遙遙入越州。恭拜後塵欽盛德。瑞雲靉靆蹕罕林邱。

福田源三郎

魚族跳波海氣祥。越山草木色蒼蒼。遙知鶴輦降臨處。恩露留
爲萬丈光。

和田甚三郎

恭迎鶴駕素秋天。靄靄祥雲罩陌阡。草莽微臣無限感。伏祈皇
統萬斯年。

有馬壽鎭

鶴輿到處湧歡聲。親拜清顏感寵榮。監撫功高無可比。野歌一
曲頌昇平。

岡本惠音

仙鶴翺翔北陸天。嵩呼聲沸錦旗前。金風玉露好時節。馥郁菊
花薰四邊。

中村万五郎

明治已酉菊花秋。鶴駕巡遊北陸州。追賚往功垂寵顧。宣揚德
化及邊陬。

さなからに在せる神の祭かな　荒井喜太郎

民草のしけるも露の惠みかな　八十八歳 連傳

幸に千載一遇豐の秋　七十四歳 富田知剛

存生へし甲斐も有けりけふの月　八十三歳 宇賀治さゐ

仰き見る足羽の山やまつの月　七十九歳 菅谷義方

越の野や朝日ににほふ稻の花　下里宣

草も木も靡かぬはなし秋の風　早瀨正二

這ひいて〻拜むや草の蟲までも　井上一菴

御車を迎ふ越路や野の錦　竹村忠近

生延てをかむ御影や今日の月　吉村佐吉

歡ひの聲は空にも花火かな　勝村清

待ち〳〵て仰くや越の月さやか　佐佐木長助

賤か家もあまねき月の光かな　多田五七郎

出る月の惠み受てや稻の花　清水彦七

越路まて惠み嬉しき菊の露　酢谷三太夫

根分ありし頃より待ちて菊の花　桐山伊三郎

下草の薫るも菊のしつくより　秋田春吉

百草の錦も露のめくみかな　池端榮之助

菊の香や鄙の住居もひなめかす　藤井錦二

豐なる秋や日蔭の草までも　松本琢次

月待つや屢はらふ松の塵　岩崎久榮

誠心をこめてをかまむ今日の月　竹谷藤久松

時なれや下草にまて菊の露　勝村捨松

掃除して月を迎へむ松の上　清水喜代志

さし登る旭や松もいろかへす　木下喜太郎

山里も惠みにもれす月の照り　稻崎兵次郎

聖代をあふけは高し月の秋　藏愛次郎

鶴の舞ふ空やうつくし秋日和　朝倉道宣

出る日の惠みを受けて稻の花　横山喜作

今日の月あふかぬ人もなかりけり　酒井謙二

日の惠みうけて荒野も花野哉　牧野由太郎

月影に氣高き菊のにほひ哉　多田甚作

時を得て越路の月の秋ゆたか　八木友作

幸にあへり紅葉の足羽山　多田六松

出る日のにほふ越路の秋豐　小林守忠

仰き見む松の稍にけふの月　土田重

御園よりにほひの漏て菊の花　小林善太郎

三越路に晴わたりけり秋日和　鷲田土三郎

一天にちりなき秋や鶴白し　德山繁樹

仰くけふ足羽の山のはつ紅葉　井上孫作

おふけなき露にうるはふ秋の草　山本晋

賤か家にかたしけなしや月の影　宇賀治丹造

風わたる八千穂豐に鶴の聲　山口尙

あらうれし惠みの露に穰る秋　笹谷練平

露はぬ民くさも無し玉の露　河合久

むら雀踊る園生の竹の春　井戸時也

民くさの仰く御影や秋日和　前波迅

御車にあきの七草なひきけり　井上遠

柴の戸に御簾光るや秋日和　榊原久

うるはしき色なり菊の花に露　吉田良作

秋の日を仰けは崇し越の空　大武玄夫

秋晴る越路に鶴駕迎へけり　山崎吟狂

緑門やみくるま迎ふこしの秋　平本良夫

御旅館や鶴駕迎へて蘭薫る　野口文吉

老松に鶴の羽音や秋高し　福田源太

御來道桔梗かるかや女郎花　長谷川光二

折伏して御成をかむ露の草　高村佐太郎

心して吹けよ玉江の芦の風　多田五右衛門

老母負ふて鶴駕拜すや秋涼し　堀田博夫

蟄蟲も翹ならさめ秋日和　早見光太郎

明日や千草のなかにすたく蟲　宮地與三松

深山路へ日影庖て秋ゆたか　青園鐵英

幸行なり越の南にかほる菊　七十四歳 近藤香雨

民草に尊き影や今日の月　加藤新造

かしこさに小鳥も飛はす秋の原　内田廉

草も今餘恩の榮に錦かな　倉橋松之助

草も木も潤ふ露の惠かな　松澤清吉

言の葉につくせぬ月の光かな　八木平助

照す日の惠や豐の稻の花　織田仙吉

御車をむかふ稻田の戰きふり　數谷藤三郎

雨晴の日より待ちけり月今宵　中村和堂

御車のもとに額突く盃かな　牧野六起

いたゝかは齢のふるさ幾久の酒　岩崎銀松（八十一歳）

安な尊三五の月や御代の晴　水上三右衛門

待ちまちた名月仰く今宵かな　今村佐治平

聳え立つ峯にをかむやけふの月　川崎一鶴

御代豐さはる雲なし秋日和　加藤一水

御惠みの深きかをりや稲の花　伴宗孝

おのつから心の赤き西瓜かな　石川清喜

貢き物出揃ふ野邊の稲穂かな　石川清次郎

憚らす歌詠みかたる蚯蚓かな　福島德右衛門

秋の風何處もくさのなひきけり　松永禪月

額突けは尊き菊の薫りかな　森丹秀

九重の雲たなひくや秋の空　馬田殖雄

稲雀まて千代〳〵と祝ひけり　堀川覺太郎

いと高き園生の菊の匂ひかな　舘榮治郎

虫もみな這出る月の明りかな　吉田幾太郎

日の恩を受て傾く早稲晩稲　舘榮松

心たけ君にさゝけむあけ花火　舘六松

日の惠み仰く姿や稲のはな　堀川覺治郎

鶴聲の道筋ひろし稲むしろ　稲束藤三郎

日の御子の御幸にこしの秋豊　馬田茂治郎

草の香や七谷越えし山畑も　齊藤修三

見そなはす里の榮や稲の花　福岡榮一郎

片里へ行幸の曠やはつ紅葉　柳瀬藤七

待宵や明日の行幸を千歳とも　福田福次

優曇華や老も杖曳く秋日和　尾形隆慶

折柄ぞ御幸に曠のくさにしき　丸山彌吉

ちりくもりなき空仰くけふの月　柳瀬彦左衛門

世を廣ふ菊の香惠む日和哉　上島嘉左衛門

路端に皆うつむくや花すゝき　柳瀬彦助

稲の穂も首を重たる御幸かな　大柳又治

かしこみてあふけは高し月の華　落合靜

御車や菊の香のうつたかき　林清右衛門

曇なきみ空をあふく月の照り　大柳又三郎

こゝろよく靡く草木やはつあらし　林繁治

鳳輦ををかむ果報や霧の朝　榎木利平

越の山こゝしを曠のはつ紅葉　小林作兵衛

木犀の香もいや高し御成道　山田四十一

早稲は穂に出てうつくまる姿哉　辻岡藤七

待宵や老の氣配る庭掃除　辻岡文兵衛

君か代や律吹く松も聲しつか　辻岡卯一

道ひろき惠みの影や秋の月　小林勝左衛門

さく菊の薫りに都鄙の隔なし　高橋利右衛門

豊なる秋のこし路や鶴の聲　加藤留次郎

初潮のさす頃鶴駕を仰く民　村上彌三郎

菊咲や香り絹織る里までも　村上彌一

御惠みの光りや高ふ仰く月　加藤吉右衛門

燈明寺曙や秋の御野立　小泉六右衛門

畏くも捧けん越の新しほり　村上榮太郎

新月の光りほのめく越の空　橋本新兵衛

豐秋や御車拜む越の幸　橋本環

御巡りや玉江姫川月の秋　山本喜右衛門

蒼草の花も朝日の御惠みに　勝田忠平

菊の香や賤き身にもうくる幸　永宮仁左衛門

奉迎や錦着かさる野も山も　大橋庄右衛門

昇らるゝ月の路や日本晴　古澤治太郎

民くさもはなさく今世の惠みから　間所伊三郎

此秋はこゝにさやけし越の月　岩堀善松

白菊のにほふや賤かふせやまて　社御地卯三郎

なからへて戴く菊のにほひかな　兒玉甚松

集ひきて雀もうたふ竹の春　飛田仙之助

鳴子守る爺も拜するけふの月　桃井龍雄

秋風や琴彈きかたる松の聲　三谷潤

仰き見る秋や夜の空晝の空　鳥居素友

名月やあけて覺ゆる松の聲　北野乙次

百草の露にたふとき朝日かな　杉田平十郎

はつかりの音信たのし越の里　吉田眞

一頻りつゝ色かへぬ松のかせ　齋藤治助

機の手もしはしとゝめて秋靜　齋藤淨治

待得たるさかりうれしき菊の花　齊藤賢治

行啓にあふも千草の花の幸　三玄耕玄

歡迎の民のこゝろは紅葉かな　森田幹

澄む月を仰くや越の海の上　稻津久左衛門

田舍まて尊き菊の薫りかな　松田豊吉

歡迎の道筋きよき今朝の露　横山甚三郎

行啓の折や野山も唐にしき　尾崎淳次郎

染る山聳をまつ折からに　松山守之助

歡迎や田毎のいねも俯きぬ　龜谷安兵衛

初潮を迎ふ我等も砂の數　島田正一郎

皆咲て錦をかされ野の千草　西澤德藏

歡迎に大空たかし秋日和　杉本留吉

それ〳〵に松蟲の音や鈴蟲も　元文伊兵衛

時を得て仰く光やけふの月　近藤金次郎

月の露に浴むや越の民くさも　浦田金作

日の惠み仰くや稻も俯ひて　田中市兵衛

松も律ふいて迎ふや足羽山　近藤五郎右衛門

謳歌して瑞穗さゝけむ豐の秋　伴野六郎

草に伏して謳歌かしこし筆つ蟲　川池由良

御影仰く三越の空や秋日和　島田階介

天津日嗣光をあふくあきひより　松村行謹

秋の田の御製を今もあふく民　村岡普攝

鶴の影あふくや越の秋最中　松村國平

丹頂の舞ふ越の野や秋の空　岩佐枕水

恩の波に浴する御代の秋豐　丸屋說三

天津空舞ふ鶴こしの秋日和　高澤彰

恩の雨露や民草なひく越の野へ　高澤透

荻薄惠む日影をあふきけり　澤田武平

御代なれや玉車あふく越の秋　小林孫平

徑まて蟲のうこめく月あかり　島崎龍士

かしこみて菊の香仰く越の民　藤田久三郎

かしこみて玉車迎ふ小田の鴈　野村卯吉

手をついて御幸を拜す秋津蟲　藤丸平造

澄渡る月やうつふく露の萩　清水作治

時を得し浮木の龜や月の秋　前田利右衛門

彌高き露の惠みや野邊のくさ　安木甚平

露の恩先つうるはふ竹の春　岸名基

秋高き空や瑞穗の風わたる　光成八十太郎

うつむひて朝日いたゝく稻穗かな　中島恒太郎

鶴聲に光を添ふる花野かな　内田常

稻も伏して仰く形や御代の秋　室山貞

御園生の影をあふくや竹の春　牧野政寳

日の恩やけふ刈初めの小田の早稻　岡田準吉

あらたふと月の光にはらつゝみ　畑有峯

日の影や錦をかさる秋の山　佐々木衡

日の恩や越の山路の蔦にしき　坂井太之介

億兆の民やいはゝむきくの宴　七十五歳 天田安兵衛

瑠璃鳥の聲や越路の松の琴　有馬行胃

日の恩や名の無き里もくさの花　笹岡昌吉

越の野も照りて隈なし月の恩　倭田善七

越路照る眞如の月を仰きけり　横山周介

月に伸ひ日に實りけり御代の稻　森去來

御代なれや瑞穗の國の八束稻　三谷善太郎

臥待ちの夜も起きて待つ御代の月　大谷慈觀

泰平や菊いたゝきてうれしなき　三谷新兵衛

名月の影やたふとき北日本　庄山甚太郎

世に高き光尊し富士の月　佐佐木權

天あふく豐芦原や雁のむれ　正山幹

鳳輦のきしる越路や草にしき　遠藤寛次郎

長しへに色やかはらぬ御代の松　渡邊平三郎

日の惠み受し越路の青ひさこ　藤田鉄之助

藤袴のこして刈らむ女郎花　馬面忠右衛門

世ににほひある菊月の御成哉　林津根次郎

茶けふりの萬戸賑はし秋の暮　廣川才吉

越の野や萬古不易の御前菊　汐見市衛

泰平の世はありかたし稻の出來　庄山利八

海原を隔てゝさゝく蝦夷錦　阿部巖

古池の蛙うかみし一葉船　林金太郎

藤島に御成や蟲も鈴を振り　千柴平助

千載の一遇嬉しく踊りけり　林平右衛門

御代なれや二百十日の涙しつか　久保田淺之助

月の夜や鶴の羽たゝく神の森　加納信

初月をあふく越路や葎の戸　富山三五郎

民くさの惠に伸ひて落し水　千秋熊次郎

月の光あふきて稼く木賊かり　川端久米吉

日に錦する君か代や麒麟草　阿部精

日の惠いたゝく垣やからす瓜　八十四歳　大池周助

白妙の露もめてたし旭のひかり　七十八歳　福田茂三郎

伏屋にもにほひこはるゝ菊の露　戸田善四郎

出揃ひて頭を下る稻穗かな　藤丸正睿

載きてあふく雲井や菊の水　津田吉衛

畏みて鳴止む虫や旭のひかり　細井勘左衛門

くさむらの虫も這ひ出て秋の月　金崎富美

舞ふ鶴の巖の松や秋冷し　皆吉五郎

草も木もなひく光や惠む露　津田吉衛

豐の秋瑞穗の色のかをりかな　江川惣之助

畏しや園生の菊のその薫り　廣濱巧

案山子にもかへて着せけり參宮笠　佐佐木近江

羽力のつきて飛けり秋津むし　伊藤吉之助

常にくもる北の陸路や月今霄　川崎孝吉

鶺鴒の尾や長しへの御代の巖　福田守甫

御園から菊のにほひの飜れけり　今川靈意

御所柿をさゝく越路や松ゆたか　水野清二

菊の日や手を付く草も匂ふ露　佐藤八右衛門

袴着け幕ごりけり菊の庭　志田彌

待し雨たりて艶ます青田かな　澤田利亮

心あらは風よきて吹け菊の畑　上西彌六

月宿すほまれや越の新田塚　横井潔

行幸ある其日や高く新走り　松田雅雄

鶴や舞ふ秋豊なる行幸の日　久我確

野も山も錦着かされ行幸の日　横井仲子

桐の葉もちらす越路の波靜　天井十郎太郎

秋の空不二玲瓏ご聳えけり　野村華陰

君か代の律のしらへも老の松　山本匡輔

明治四十二年九月十五日印刷
明治四十二年九月十八日發行

福井縣

岐阜縣安八郡大垣町字郭百五十三番戸
西濃印刷株式會社代表者
印刷者　河田貞次郎

岐阜縣安八郡大垣町字郭百五十三番戸
印刷所　西濃印刷株式會社